

仏教はどのように暴力を克服することができるのか	1
2008年度「指定研究」研究組織一覧	2
2008年度「指定研究」研究目的紹介	4
2008年度「一般研究」選考結果発表	8
2008年度「一般研究」研究目的紹介	10
海外調査出張報告	14
全国大学史料協議会参加報告	17
研究開発報告	20
学術共同研究報告	22
特別研究員研究成果報告	24
兼報	27

研究所報

No.52

2008. 5. 1.

仏教はどのように暴力を克服することができるのか—

「パレスチナ・イスラエル・日本—宗教者間対話を通じて考える中東平和」に参加して考えたこと

国際仏教研究チーフ 教授 ロバート F. ローズ

昨年の11月15日に、京都・宗教系大学院連合 (K-GURS) とアーンユス仏教国際協力ネットワークの主催する「パレスチナ・イスラエル・日本—宗教者間対話を通じて考える中東平和」と題されたシンポジウムが開催されました。このシンポジウムはパレスチナとイスラエルで平和活動を行っているユダヤ教・イスラム・キリスト教の代表三人を京都に招き、仏教の代表三人と中東平和について対話を行うというものでした。英語で発表する必要であったため、本学からは私と客員教授のマイケル・パイ先生が仏教の代表として参加しました。私は以前から仏教こそ世界のさまざまな紛争を解決する鍵になると考えていましたので、「仏教ではどのように暴力を克服すると考えるか」をテーマに、ベトナムの僧侶ティク・ナットハン (Thich Nhat Hanh) の詩を引用しながら、意見を述べさせていただきました。

シンポジウムに参加して強く感じたことは、ユダヤ教・イスラム・キリスト教の代表はいずれも、切実に平和を望んでいるということでした。そして、メディアではあまり注目されていませんが、みなその願いを実現するために実践的な活動を行っていることを知り感動しました。同時に、これらの報告を聞きながら、なぜパレスチナの人々が平和を心から望んでいるにもかかわらず、悲惨な争いと殺し合いが続いているのかという、だれでも考えるような問いが私の中にも湧いてきました。その答えはユダヤ教の代表者の発言のなかに聞き取ることができたように思います。その発言のなかで彼は、ユダヤ人のアイデンティティーの中核にはイスラエルという土地、具体的にはエルサレムという聖地に対する深い愛着があることを語りました。AD70年にローマ軍によってエルサレムから追放されて以降、いつかこの地に戻ることを夢見て、迫害に耐えながら2000年ものあいだ生き続けてきたので、エルサレムはユダヤ人のアイデンティティーそのものだと、彼は強く訴えました。しかし、いうまでもなくエルサレムはキ

リスト教徒やイスラム教徒にとっても、重要な聖地です。この聖地に対する深い思いが、さまざまな政治的・文化的・経済的条件とあいまって、今日のパレスチナの悲劇を生み出しているように思いました。

そもそも人間は自己のアイデンティティーが脅かされたとき、それを補強しようとして原理主義に走ることが多いように思います。しかし仏教では、自我を含めてすべてのものに対する愛着を煩惱と捉え、それを超えて行くことこそが解脱への道だと説きます。そのため仏教の立場から言うと、エルサレムに対する愛着も、ユダヤ人のアイデンティティーの中核をなすものであったとしても、最終的には捨て去らなければならないものです。問題はエルサレムを心の支えにしてきたさまざまな民族の人々や宗教の信者たちが、その地を大切にしながらも、その地に対する執着をいかに超え、その地でいかに共存する道を見出しうるか、ということです。極めて困難な課題ですが、これは世界に平和をもたらすためにはぜひ解決しなければならない課題だと思います。

私は今年度から真宗総合研究所の指定研究である国際仏教研究班のチーフを務めることになりました。この研究班に関わってから既に20年を超えています。以前からこの研究班の活動を通じて、大谷大学が仏教を中心とした宗教研究の世界的センターになることに、少しでも貢献できればと密かに願っていました。しかし今回のシンポジウムに参加して、仏教思想を世界に発信するためには、抽象的な論理に留まらず、世界の各地で起こっているさまざまな宗教間の対立や紛争についても、積極的に発言してゆかなければならないことを痛感しました。そのような諸問題に答えて初めて、大谷大学の仏教は世界の仏教になりえるのです。

2008(平成20)年度「指定研究」研究組織一覽

【特別指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
大谷大学親鸞聖人 750回御遠忌記念 特別指定研究	<p>研究課題 親鸞像の再構築</p> <p>研究員 門脇 健 (チーフ・教授・宗教学) 草野 颯 之 (教授・日本仏教史学) 延塚 知 道 (教授・真宗学) 水島 見 一 (教授・真宗学) 安富 信 哉 (教授・真宗学) 山野 俊 郎 (教授・仏教学) 一 楽 真 (准教授・真宗学) 東 館 紹 見 (准教授・日本仏教史学) 山 田 恵 文 (講師・真宗学)</p> <p>嘱託研究員 平 雅 行 (大阪大学教授) 小 山 正 文 (同朋大学非常勤講師・安城市本證寺住職)</p> <p>研究補助員 松 金 直 美 (博士後期課程満期退学) 玉 光 真 人 (博士後期課程第2学年)</p>

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開</p> <p>研究員 ロバートF.ローズ (チーフ・キャップ・教授・仏教学) 浅見 直一郎 (キャップ・教授・東洋史学) デイディエ・ヴェステル (教授・フランス語・フランス文化) 桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学) 田 辺 繁 治 (教授・社会人類学・東南アジア人類学) 番 場 寛 (教授・フランス語・フランス文学) 村 山 保 史 (准教授・西洋哲学) 阿 部 利 洋 (講師・社会学) 井 上 尚 実 (講師・真宗学) 廣 川 智 貴 (講師・ドイツ文学) 藤 枝 真 (講師・哲学・宗教学) 箕 浦 暁 雄 (講師・仏教学)</p> <p>嘱託研究員 羽 田 信 生 (毎田周一センター所長) Michael Pye (マールブルク大学名誉教授・本学客員教授) Paul Watt (デポー大学教授) Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学准教授)</p> <p>研究補助員 井 黒 忍 (日本学術振興会特別研究員・本学特別研究員) 小 澤 千 晶 (本学非常勤講師) マイケル・コンウェイ (博士後期課程第3学年) 福 島 重 (博士後期課程第3学年) 村 田 知 子 (博士後期課程第3学年) アダム・キャット (博士後期課程第2学年)</p>

西蔵文献研究	<p>研究課題 チベット語文献のデータベース化</p> <p>研究員 福田 洋一 (チーフ・教授・仏教学) 三宅 伸一郎 (講師・チベット学)</p> <p>嘱託研究員 白館 戒雲 (本学非常勤講師) ダシュ ショバラニ (特別研究員・本学非常勤講師) 野村 正次郎 (広島修道大学非常勤講師) Steven Hartwell (マルチスクリプト・ソリューション社)</p> <p>研究補助員 松下 俊英 (博士後期課程第3学年) 太田 蒔子 (博士後期課程第2学年)</p>
大谷大学DB研究	<p>研究課題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化</p> <p>研究員 宮下 晴輝 (チーフ・教授・仏教学) 兵藤 一夫 (教授・仏教学) 山本 貴子 (准教授・図書館情報学) 酒井 恵光 (講師・人文情報学)</p> <p>嘱託研究員 清水 洋平 (日本学術振興会特別研究員・本学非常勤講師)</p> <p>研究補助員 林 哲照 (博士後期課程第2学年)</p>
真宗本廟(東本願寺) 造営史研究	<p>研究課題 真宗本廟(東本願寺)造営史料の研究ならびに『本願を受け継ぐ人びとー真宗本廟(東本願寺)造営史ー』の編纂</p> <p>研究員 木場 明志 (チーフ・教授・国史学) 平野 寿則 (講師・日本近世史・仏教史)</p> <p>嘱託研究員 伊藤 延男 (神戸芸術工科大学名誉教授) 川上 貢 (京都大学名誉教授・京都市埋蔵文化財研究所長) 永井 規男 (関西大学名誉教授) 山岸 常人 (京都大学大学院准教授) 安藤 弥 (同朋大学文学部講師) 江上 琢成 (本学博士後期課程修了・慶應義塾大学 総合政策学部在学中)</p> <p>研究補助員 川端 泰幸 (本学非常勤講師) 岸 泰子 (京都大学大学院工学研究科助教) 登谷 伸宏 (京都大学研修員) 大谷 めぐみ (博士後期課程満期退学) 工藤 克洋 (博士後期課程第3学年)</p>

【大谷大学史資料室】

研究名	研究課題及び研究組織
大谷大学史資料室	<p>整理課題 大学史関係資料の収集・整理</p> <p>資料室長 松川 節 (研究所主事・教授・東洋史学)</p> <p>研究補助員 小野 賢明 (博士後期課程満期退学) 大畑 博嗣 (博士後期課程第3学年)</p>

2008(平成20)年度「指定研究」研究目的紹介

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念
特別指定研究

親鸞像の再構築

チーフ・教授 門脇 健
(宗教学)

本研究では、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に向けて、1961年の700回御遠忌以降の親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的とし、「親鸞像の再構築」を課題に、研究活動を行なって来ている。そのために、以下の四つのテーマを設けている。

- a. 史的な親鸞像の再検討
- b. 思想教学の検証
- c. 現代における親鸞思想との出会い
- d. 文献目録の作成

過去3年間の活動においてはおもに「a. 史的な親鸞像の再検討」と「d. 文献目録の作成」に取り組んできたが、昨年度はそれに加えて「b. 思想教学の検証」にも本格的に着手した。

「a. 史的な親鸞像の再検討」「b. 思想教学の検証」については、学内外の先生を講師にお招きし、公開研究会を重ねてきた。

「a. 史的な親鸞像の再検討」については、「親鸞伝史料としての中世真宗絵巻」(小山正文氏)、「『親鸞聖人御因縁』の展開」(塩谷菊美氏)、「御遠忌の歴史—自己と時代に向き合う—」(大桑斉氏)、「善鸞義絶状と偽作説」(平雅行氏)、「親鸞(伝)研究の諸問題」(草野顕之氏)、「親鸞の越後配流と承元の奏状—『教行信証』後序をめぐる—」(平雅行氏)という公開研究会を開催してきた。

また、「b. 思想教学の検証」に関しては、「今、親鸞像の再構築ということ—吉野秀雄、廣小路亨の親鸞思想について—」(福島和人氏)、「この時代に、「本願を聞く」ということ—何を考えるべきか—」(本多弘之氏)という公開研究会を開催した。

これらの研究会の記録は、公刊可能なものを今年度より活字化して関係者・関係部署に配布し、具体的な活動報告とするとともに、本研究会活動に対する各位・各所

よりのご意見を拝聴する機会としたい。

「d. 文献目録の作成」は、具体的な問題点も明確になってきたので、それを解決しつつ公開に向けてさらに整備を進めていく。

本年度はさらに、このような公開研究会・目録整備を継続するとともに、「c. 現代における親鸞思想との出会い」の研究方向を確定し、それとともに全体的な研究体制を再検討し3年後に迫った御遠忌への具体的準備を開始したい。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の 把握と資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 ロバートF・ローズ
(仏教学)

【研究テーマ】

諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の整理・収集・公開

【研究目的】

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。この目的を遂行するために、これまで受信と発信の両面から以下のような活動を行ってきた。本年もこれらを発展的に継続する。

〈受信〉①海外における仏教関係書誌の収集・整理とデータベースの構築。②仏教を中心とした宗教研究者を招聘しての講演会・研究会の開催。③海外における宗教及び関連文化の諸相の調査。

〈発信〉①真宗・仏教関係文献の翻訳と出版。②仏教・宗教関係国際学会における大谷大学企画パネルの発表。③仏教・宗教関係国際学会に研究員が参加して論文発表。④仏教・宗教関係国際学会を企画・開催。

【研究計画】

本研究班では英語圏を中心として研究活動を行ってきたが、近年は中国やヨーロッパなど、他の言語文化圏へ

も活動の範囲を拡大している。各言語文化圏を担当する班と研究テーマ・目的ならびに本年度の研究計画は、以下の通りである。

—英語班—

〈研究テーマ〉

- ①諸外国における仏教研究動向の把握
- ②真宗・仏教関連資料の翻訳出版

〈研究目的〉

- ①英語班では、これまで国際学会への研究員の派遣や国際学会の企画開催などを継続的に行ってきた。本年度は9月にイタリアで開催されるヨーロッパ日本研究協会国際会議の宗教・思想史部会に「Where Have All the Pure Lands Gone? - Challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism -」と題してパネル参加する。また国際仏教学会大会(6月、アトランタ)などの国際学会に研究員を派遣し、情報収集ならびに本学仏教研究の発信に努めたい。
- ②翻訳出版に関しては、近年取り組んできた近代真宗教学のアンソロジーを、ニューヨーク州立大学出版(SUNY)から今年度中に発刊する予定である。そのための最終作業を進める。更に、近い将来このアンソロジー出版を記念した国際シンポジウムが開催できるように計画を立てる。
- ③英語班が収集してきた仏教関係の洋書・学会誌の整理を行い、データベースを利用しやすい形に改めていく。

—ドイツ・フランス班—

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教の比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話研究」(ドイツ)
- ②「近代化と宗教：主に浄土真宗の社会的観点からの研究」(フランス)

〈研究目的〉

- ①マールブルク大学神学部との研究交流を中心にしながら、真宗とプロテスタント神学の対話・比較研究を継続して進める。本年度中に神学部教授ディートリッヒ・コルシュ氏の著書『マルティン・ルター』の翻訳を出版する予定である。また5月にマールブルク大学で開催されるルドルフ・オットー・シンポジウムに研究員を派遣し、研究発表を通じて相互交流を深める。
- ②2006年度に開催されたフランス高等研究院との合同シンポジウム「宗教と近代合理的精神-日仏文化の比較をとおして」の基調講演・発表論文・総括とコ

メントを日本語で出版する。更に、2009年の5月にパリで開催される予定の次回合同シンポジウムの準備を進める。

—中国班—

〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究

〈研究目的〉

中国華北地域(河北・河南・山西・山東各省)・東北地域(遼寧・吉林・黒竜江各省)・東部モンゴル(内モンゴル自治区東部)地域における宗教及び関連文化の諸相を、歴史資料による再構成及び現地調査によって明らかにする。その目的のため、昨年度に引き続き以下の活動を進める。

- ①大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」(海外布教関係部分の資料)に含まれる当該地域関連資料の目録作成作業を進める。
- ②中国東北師範大学との共同研究という形で進めてきた当該地域の中国仏教寺院、チベット・モンゴル仏教寺院の概況と諸宗教の混交形態についての研究を継続する。

西藏文献研究

チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究課題は、本学所蔵チベット語文献に対する調査・整理・データベース化(テキストの電子化)といった作業を核とし、あわせて関連する文献の収集や現地調査、研究会の開催等を通じ、チベット研究の促進をはかることを目的としている。上記目的遂行のため、具体的には以下の研究項目に取り組む。

- 1) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化。

a. チベット蔵外文献の研究

大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献(チベット撰述文献)のうち稀覯書公開という意味を込めて『チベット語訳大唐西域記』『俱舍論語義解明・善説の陽光』『目

連救母経』など貴重な写本を翻刻電子化し公開することを中心とする。

b. 北京版カンギュルの研究

寺本婉雅や桜部文鏡ら本学チベット研究の先学による『甘殊爾勘同目録』（1930～32）は、刊行後70年を経た現在も、すぐれたリファレンスとしてその価値を失ってはいない。そこで、この研究では、絶版となり入手困難となっている当該目録の合冊復刊に向けて詰めの作業をおこなう。またこの研究では、現在公開中の北京版チベット大蔵経オンライン目録検索のデータ見直しとUnicode化をはかる。

2) Otani Unicode Tibetan Language Kitのサポート

昨年10月26日に発売されたMacOSX 10.5 Leopardに、本研究課題が開発したOtani Unicode Tibetan Language Kitが正式に搭載されたが、若干の不具合（たとえばいくつかの文字組み合わせ不足等）がみられる。より完成されたものを提供するため、Apple社と連絡をとりながら、不具合の発見とその修正をおこなう。

3) 現地研究機関との交流・提携

資料の収集や学会への参加等を積極的におこない、現地研究者／研究機関との交流を深める。

4) オリッサ州SARASVATI研究所所蔵貝葉写本の研究

東インド・オリッサ州は、独自の貝葉文化の栄えた土地である。同州にあるSARASVATI研究所には数多くの未整理貝葉文献が眠っている。その整理とカタログ化のため、現地スタッフに書誌情報の収集を依頼するとともに、既に収集された約300本の写本に対するデータの整理と入力を進める。

5) その他

適宜学外講師を招いて、チベット学関係の研究会を開催する。また、本研究課題が収集／借用中の資料整理もおこなう。

大谷大学DB研究

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化

チーフ・教授 宮下 晴輝
(仏教学)

研究目的

大谷大学の所蔵する貴重な学術的資産をデータベース化し、劇的にデジタル化の進む現代社会における活用を図ることは、いまや本学の重大な使命となっている。しかし、これまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられているものの、全学的な視野をもったデータベースの構築はなされてきていない。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とその具体的な実施、および公開方法についての検討を行なう。

課題となるさまざまなデータベース構築に際しては、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、さらには学内外の協力者を得て「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有するとともに、研究成果を発信してゆきたい。

研究計画

これまでの成果をふまえ、学内の諸機関（とくに図書館）、研究所の諸研究班と協力体制を組みながらデータベース構築を行うとともに、真宗関係文化財のデジタル化を進め、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に合わせた公開を目指した取り組みを進める。なお、本学所蔵貴重資料のデジタル化・データベース化並びにその公開については、外部資金導入も視野に入れて推進する。

本研究班は、下記の項目にわたってのデータベース構築を目指している。

1. 大谷大学図書館所蔵『北京版チベット大蔵経』、チベット語蔵外文献、パリ貝葉写本のデジタル画像データベース化
2. 真宗関係文化財（音声テープ・写真など）の収集、デジタル化並びに公開
3. 『北京版チベット大蔵経』、スタイン収集敦煌出

- 土文献などのマイクロフィッシュのデジタル化
4. 「教行信証」、清沢満之自筆原稿など、すでにデジタル化されているデータの移管と公開に向けての検討
 5. その他の資料

本年度は、これらの中で優先順位を考え、具体的なデータベース構築計画を策定し、実際の構築に向けての作業を行う。

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟(東本願寺)造営史料の研究 ならびに『本願を受け継ぐ人びと—真 宗本廟(東本願寺)造営史—』の編纂

チーフ・教授 木場 明志
(国史学)

「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業として、2000年以来、本山御遠忌本部が進めてきた「両堂再建史料の研究・整理・保管」を、真宗大谷派と本学との間で業務委託契約を締結し、昨年度発足した研究プロジェクトである。なお、本プロジェクトは、2009年度までの4年間を研究期間とする。

東本願寺所蔵史料の調査は、1990年以来続行されており、漸次その全容が明らかになりつつあるが、その6万点以上の古文書・古記録類の中に、両堂再建を中心とする真宗本廟造営に関する史料は6千点にもほなる。本研究においては、それら本廟造営史料の調査・整理・研究をふまえ、本廟の造営再建の歴史を明らかにすると共に、『本願を受け継ぐ人々—真宗本廟(東本願寺)造営史—』の編纂を進めることを目的とする。とくに編纂事業については、歴史・建築・美術・工芸・防災等の諸方面に寄与すべく、信仰史・教団史を基盤に真宗本廟の具体的な諸相を描き出し、真宗門徒の帰依処としての存在意味を確認したい。

真宗本廟は、宗祖親鸞聖人の示寂後、1272（文永9）年に東山大谷の地に草創され、本願寺第七世存如の頃には、御影堂・阿弥陀堂を備えた両堂形式になったとされる。江戸初期の1602（慶長7）年、徳川家康による寺地寄進を経て、烏丸七条に寺基を定めて東本願寺が創立されると、1661（寛文1）年の親鸞聖人四百回忌を契機に

改築が行われ、その威容を誇る大建築となった。その後、1788（天明8）年、1823（文政6）年、1858（安政5）年、1864（元治1）年の四度に及んで罹災焼失し、そのたびに再建が行われて、現在の建築は1895（明治28）年に竣工された。

こうした焼失と再建の歴史の中で、明治度造営に関しては、経過・教化体制・職人組織・部分請負的寄進・門徒参加などの諸問題が明らかにされてきたが、今般の研究では、新たに発見された東本願寺所蔵の再建造営史料の利用を通して、江戸期における再建造営の諸相について、その全般的な把握が課題とされる。2007年度は、関連諸資料の精査・分類・翻刻、執筆用資料ファイルの作成を進めると共に、公開研究会・個別課題の研究報告会の成果をふまえて、『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟(東本願寺)造営史—』の書名及び内容目次を確定し、各執筆者の選定と依頼を行って原稿執筆の段階に入った。2008年度は、関連諸史料の調査・研究を継続し、各執筆者からの要望に応じると共に、「執筆者会議並びに事務連絡会議」と「公開研究会並びに編集委員会」を開催し、原稿執筆・編纂作業を鋭意に進める予定である。2009年度中には、本文内容および諸史料の校正作業を行い、本プロジェクト終了後、本山御遠忌事務局において、2010年11月に刊行する計画である。

2008(平成20)年度「一般研究」選考結果発表

【共同研究】

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
豊島 修	研究課題 本願所寺院組織の確立と信仰文化の形成・伝播に関する歴史民俗学的研究 研究員 豊島 修 (教授・日本近世庶民生活文化史・日本宗教民俗学) 平野 寿則 (講師・日本近世史・仏教史) 協同研究員 鈴木 昭英 (元長岡市立科学博物館長) 根井 浄 (龍谷大学特任教授) 山本 殖生 (新宮市教育委員会文化振興室長) 加藤 基樹 (任期制助教)	200万円
田辺 繁治	研究課題 東南アジア大陸部における生成的コミュニティ 研究員 田辺 繁治 (教授・社会人類学) 高井 康弘 (教授・社会学・文化人類学) 阿部 利洋 (講師・社会学) 協同研究員 松田 素二 (京都大学大学院教授) 藤田 直子 (元任期制助手) 古谷 伸子 (任期制助教) 研究協力員 堀井 愛 (博士後期課程満期退学) 矢野 博之 (博士後期課程満期退学)	※科学研究費採択のため補助金なし
志藤 修史	研究課題 聴覚障害者への地域生活支援のためのプログラム研究 研究員 志藤 修史 (准教授・社会福祉学) 安井 喜行 (教授・社会福祉学) 協同研究員 柴田 浩志 (京都市聴覚言語障害センター所長)	200万円
石橋 義秀	研究課題 近世仏教文化文献の基礎的研究 研究員 石橋 義秀 (教授・国文学) 大秦 一浩 (講師・国文学) 協同研究員 堤 邦彦 (京都精華大学教授) 佐藤 愛弓 (任期制助教) 末松 憲子 (元京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター非常勤嘱託) 菊池 政和 (花園大学非常勤講師) 橋本 章彦 (京都精華大学非常勤講師) 本井 牧子 (本学非常勤講師) 義田 孝裕 (元安田女子大学大学院研修員)	200万円
桂華 淳祥	研究課題 石刻史料からみた宋元時代華北地方における仏教の社会史的変遷に関する基礎研究 研究員 桂華 淳祥 (教授・東洋史学) 浅見 直一郎 (教授・東洋史学) 協同研究員 松浦 典弘 (大手前大学准教授) 藤原 崇人 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員) 清水 智樹 (本学非常勤講師)	200万円
柴田 みゆき	研究課題 資史料空間から任意の関心領域を柔軟に抽出・提示する新たな方法論の研究 研究員 柴田 みゆき (准教授・情報処理学) 宮下 晴輝 (教授・仏教学) 協同研究員 杉山 正治 (立命館大学情報理工学部助手) 生田 敦司 (本学非常勤講師) 斎藤 晋 (総合地球環境学研究所プロジェクト研究推進支援員・本学非常勤講師)	200万円

【個人研究】

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
水島見一	研究課題 精神主義の受容と展開－真人社と同朋会運動 研究員 水島見一(教授・真宗学)	100万円

2008(平成20)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

本願所寺院組織の確立と信仰文化の 形成・伝播に関する歴史民俗学的研究

研究代表者・教授 豊島 修
(国史学)

前年度に引き続き、「本願」・「本願所」の史料的研究を遂行することになった。本研究が対象とする「本願」とは一般に、寺社修復の役を担い、その修復料としての米銭の喜捨をもとめて諸国を遊行し、寺社の縁起や靈験を唱導した宗教者であり、結果的に信仰文化を各地へ伝播させることとなった。また「本願所」とは、それらの宗教者を統轄した寺院組織である。その典型的で大規模な事例は紀州熊野三山の「本願所」で、膨大な史料内容とそれらの歴史的展開や文化史的位置づけについては、『熊野本願所史料』として刊行し、その成果を世に問うている。

「本願」は16世紀初め頃より全国の大中の規模を有する寺社に出現し、活躍したことが史料的に知られる一方、近世初期になると、社家や寺家との争論が頻発し、職掌や役割が制限されたり、追放されたりする「本願」もいた。その意味でまず「本願」の歴史の実態を究明することは、特定の寺社史における組織的解明にとどまらず、中世後期～近世の歴史学的諸問題の検討にも寄与できる研究課題である。

「本願」の研究として一歩進んでいるのは、既述の熊野三山と山城国東山清水寺の「本願」の事例である。熊野三山の「本願」を例に挙げると、「本願所」は修験道を兼帯していたことが知られ、その成立段階においても十穀聖・五穀聖や修験道との関わりが深い存在であった。また、少なくとも17世紀中頃以前まで熊野比丘尼は熊野三山や新宮神倉山などの聖地に登山して、修行を行い、庵主・本願という寺院組織体から「熊野願職」(勸進職)を免許され、諸国に赴いては熊野牛玉札などの配札や、「老いの坂図」と「地獄絵」を上下に配した構図で特徴的な絵画類を使用して絵解きを行い、勸進行為を展開したことが知られる。熊野の「本願」は極めて組織的であり、その勸進スタイルにおいても「絵解き」という手法によって庶民レベルにまで広く熊野信仰を唱導し

た。すなわち「本願所」は、単なる寺社の堂塔修復のための募財を集積する組織ではなく、信仰・文化の流布に深く関わる組織であったといえよう。しかし、寺社によっては必ずしも「本願」が出現しなかったり、「本願所」という組織が成り立っていなかったりする事例が確認され、熊野三山「本願」の研究成果による定義が当てはまらない事例もいくつか確認されているので、さらに事例の収集と詳細検討が必要である。

昨年度は、特に巖島社や多賀社、善光寺などの「本願」について研究が進み、飯道山史料の調査・検討、「本願上人号」の事例研究、諸国「本願」史料の収集などの成果も得られ、着実に成果が上がっている。

本年度において、「本願」の所在と史料の検討、そして歴史的・民俗的意義などをまとめた書物を刊行する予定である。

共同研究

東南アジア大陸部における 生成的コミュニティ

研究代表者・教授 田辺 繁治
(社会人類学)

本研究は、昨年度からの課題(『東南アジア大陸部における生成的コミュニティ』)を継続するものである。

その理論的な中心におかれるのが生成的コミュニティの概念であり、多様で多角的な志向性と組織形態、新しい協働性と社会性をもつ集団、アソシエーション、ネットワークといった近年の動きに注目する。そこには、従来のコミュニティ概念には取まりきれない人々の欲望、想像力、潜勢力がみちており、構造やシステムとして「存在」するコミュニティとは異なり、何ものかになる、つまり自らを「生成変化」させていく力動的な過程として捉えることが可能だと考えるのである。

境界によって囲まれた場所的なコミュニティ理解、あるいはそこに形成される文化やアイデンティティを一体的なものとして捉えようとする従来のコミュニティ理解は、20世紀後半からの人々の移動、流動、排除の激化や、実体的な社会関係を超越して想像的に構築されるコミュニティやネットワークの出現等によって根本的な見直しを

せまられている。本研究の生成概念とは、このような状況における理論的要請に応えるものなのである。

本研究では、こうした生成概念を共通の参照項としながら、東南アジア大陸部（タイ、ラオス、カンボジア）における新しいタイプのコミュニティを調査し、そこで生の様式を明らかにすることを目的としている。

昨年度は、今日出現しつつある上記のような生と生存のニーズに基盤をおくコミュニティや運動に関する調査を行った。対象とするコミュニティにおける人々の欲望やニーズの多様性と差異化の実態を把握しようとしたのである。そこから、協働のあり方や相互行為の特質をいかに把握するか、という共通の問題意識を見出した。

その成果を受けて、2008(平成20)年度には次のような調査・研究計画を遂行する予定である。すなわち、人々の欲望やニーズを実現させる過程で生じる問題、それらをめぐる国際・行政機関、NGOなどの介入・連携、そしてそこに発生する対立や交渉といった局面を明らかにする。内部の差異と多様性を保持しつつも、葛藤や抵抗の状況に即応して自らを改変していく過程から「生成」の実態を描出すことを試みるつもりである。

共同研究

聴覚障害者への地域生活支援のためのプログラム研究

研究代表者・准教授 志藤 修史
(社会福祉学)

本研究では、昨年度に引き続き、地域でくらす聴覚障害者への対策の課題を明らかにし、今後の具体的対策の展開方策を示すため、聴覚障害者の生活実態の調査並びに国内外のサービス実施機関へのヒアリング調査を行う。

きこえやことばに障害を持つ聴覚障害者への対策は、単なる情報伝達手段についてのサポートといったアプローチのみではなく、コミュニケーション障害から起因する、生活全般にかかわる「くらしにくさ」への総合的対応が必要とされている。特に近年、地域生活を支援する機関からは、高齢化、重度化、さらには重複障害者の増加などが指摘されており、それらへの対策は急を要する課題となっている。

一方、高齢聴覚障害者への対応一つを例にとっても、

全国的には高齢聴覚障害者への施設の開所などの取り組みが散見されるものの、地域で暮らす多くの高齢聴覚障害者への対策は介護保険における一般的サービスでの対応が中心であり、実質的に利用不可能な状況におかれるなど、聴覚障害者への具体的対応は未だ確立しているとはいいがたい状況である。また、平成7年の阪神淡路大震災、平成16年の中越地震などで、地域とのつながりが希薄であり、かつサービスの利用に結びついていなかった多くの高齢聴覚障害者が、深刻な被害と避難・復興生活の困難さを抱えたことは記憶に新しい。

今般成立・実施をみた障害者自立支援法において強調されているように、身近な地域での生活支援との連動も含め、聴覚障害者に対するサービスの今後の展開についてはこれからの課題といえる。

このような中、平成17年度に特定非営利活動法人CS障害者放送統一機構が独立行政法人福祉医療機構の助成を受け実施した「聴覚障害者緊急災害情報保障調査・訓練事業」における講師活動、さらに平成18年からは「聴覚障害者災害対策マニュアル」作成委員への就任。全国聴覚障害者情報提供施設協議会が独立行政法人福祉医療機構の助成を受け作成した「手話通訳コーディネーターマニュアル」の分担執筆、並びに平成18年度からの同マニュアル作成事業の委員就任。同年より社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会が実施している「聴覚障害者情報ネットワーク構築事業」の委員への就任などから、聴覚障害者への対策を進めるにあたり、改めて地域での聴覚障害者の生活実態把握の必要性が感じられた。

特に、一定の地域性とそこでのサービスの状況、障害の状況、さらには階層性などにより規定され生み出されてくると想定される生活問題の把握については、一定のまとまりのあるサンプルへのヒアリング調査こそ有効であると考えられる。

我が国でのこの分野の研究が少ない中、京都（平成2・平成17）、大阪（平成11）、滋賀（平成14）、全国（平成15）などで行われたいくつかの先行の調査研究業績をふまえ、聴覚障害者への情報提供施設並びに聴覚障害者団体などの協力を得つつ、平成19年から平成20年の2カ年にわたり調査並びに分析、サービス提供システムの構築に取り組んでいく。

昨年度は、手話通訳者、要約筆記者を調査員として組織したうえで生活実態調査に取り組んだ。今年度は、調査結果についての分析を調査員組織並びに聴覚障害者支援組織、聴覚障害者組織などともに行い、国内外の聴覚障害者へのサービス機関へのヒアリング調査を実施し、今後の我が国における支援の課題を明確にするとともに、そのシステム化を構想する。

共同研究

近世仏教文化文献の基礎的研究

研究代表者・教授 石橋 義秀
(国文学)

日本の説話文学については様々な角度から研究が進められ、特に中世末までのものについては個々の作家や作品の内容、成立環境などの具体性が明らかになりつつある。しかしながら、近世以降の仏教文化文献は、中世末までの説話文学に比してあまり顧みられることがなかったが、近年、文献目録や文化学・文化史的研究として多様な研究成果が学界に問われている。

近世仏教文化文献のなかでも、通俗仏書、略縁起などを取り上げた研究は、急速に研究が進んでいる。例えば通俗仏書、すなわち近世期に直接・間接に在俗の人々への仏教の教化を目的として述作され、書写あるいは刊本として成立したものを「勸化本」と称し、西田耕三、堤邦彦、後小路薫らの研究などをはじめとして、豊かな研究成果が備わってきている。

また「略縁起」については、築瀬一雄、中野猛らによって略縁起が蒐集され、それら略縁起本文の翻刻と解題が備わっている。しかしながら、いまなお未解決の問題が多く、そもそも「略縁起」の定義や機能についてもはっきりしていない。近年、多岐にわたる近世の仏教文化文献、すなわち絵画や開帳、芸能や説話などの文化的現象との関わりについて研究が進展しつつある。今後さらに近世説話文学について、隣接する種々の文化的現象との関わりから、近世的な文学の多様性とその特徴について明らかにしていく必要がある。

近世仏教文化文献には、未だよく知られていない文献が膨大に山積しており、さらにそれらの内容のすべてを網羅するには大変な時間と労力が必要とされるため、個人研究で明らかにできる数量には限界があると言わざるを得ない。近世仏教文化文献データベースが十分ではない今日、その完全なデータベースの整備が急務である。

そこで本研究課題は、共同研究によって、その遠大な研究テーマをいよいよ本格的に着手するものである。書誌の基本的情報（外題、内題、成立、著者、体裁、法量など）を調査し、その内容やモチーフをもとに議論を積み重ね、分類をおこない、目録化を目指すものであり、

近世説話研究がかかえる課題の一助になればと思う。この研究成果は、文化学的視点を有するものであり、近世説話文学研究にとどまらず、国語国文学研究はもとより、近世仏教史研究、宗教史研究、また宗教民俗学研究、美術史研究や芸能史研究など庶民史的研究の側面、さらに思想・教学研究面など、多様な隣接学問研究にも寄与できるものと考えている。

共同研究

石刻史料からみた宋元時代華北地方における
仏教の社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

本研究は、宋元時代華北地方における仏教と社会との関わり方の歴史の変遷について、中国史の視点に加え、当時華北を領有していた遼・金・元といった異民族の支配体制や、朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族あるいは地域との関係という視点から、仏教関係石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行って当該研究の基礎データを充実させることを第一の目的とする。そして、それによって仏教界の動向を詳細に跡付けることで、従来の仏教史に対する認識をあらたにするとともに、そこに現れる事象が中国に限らず東アジア世界全体に及ぶものであることを提唱して当該研究の更なる展開を導こうとするものである。

本研究で集中的に扱おうとする石刻史料については、中国では清朝時代から、また我が国でも20世紀前半には諸研究者によってその史料価値が認められていた。しかしそれをういた研究が盛んに行われるようになったのは1980年代以降のことである。これは中国の社会情勢の変化によって研究環境が改善されたことにも起因しよう。

このような学界動向のなか、研究代表者も石刻史料、特に仏教関係のそれに着目し、拓本・録文はもとより、現地調査によって明らかになった知見を加えて、編纂史料からだけでは得られない社会の底辺の動向を跡付けてきた。そして当該時代の仏教史研究における新たな視点、すなわち、宋・金代の地域社会において寺院住持の異動などによって寺院間に密接な連繋のあったこと、その連繋が続く元代にも存続して連繋する地域を拡大させてい

る傾向があることを提示。さらに元代に設置された華北仏教界を統率する最高位の僧官が、これらの連繋の維持拡大と不可分の関係にあることにも言及した。こうして浮かび上がってきた地域社会における連繋の存在は、社会全体にわたる仏教活動の実態を把握するために見逃せない事象であり、極めて重要な意味を持つと考える。

本研究は、このような従来の研究経過を踏まえた上で、複数の研究者による多角的な観点から、より多くの具体的な事象をとらえ、仏教のネットワークのさらなる解明を目指すものである。またこの研究の主眼は仏教の活動を解明しようとするものであるが、それは当該時代の政治・経済・社会の動きなどとも密接に関わっており、ここで得られる成果は、その動向を浮かび上がらせる一途ともなり得る。その意味において、同時代を扱う他の分野の研究にも大きく寄与するものとなろう。

共同研究

資料空間から任意の関心領域を柔軟に抽出・提示する新たな方法論の研究

研究代表者・准教授 柴田 みゆき
(情報処理学)

最近のIT分野における重要課題の一つは、情報爆発に対する解決手法の提示である。これは、複雑で多岐にわたる巨大データベースの選択抽出結果の提示手法問題とも関連がある。我々の最終研究目標は、そのような選択抽出結果を、利用者がその時々において必要とする多様な形に、何度でも、柔軟に、対話的に変化させる表示システムを構築することにある。

そのための第一段階として、複雑な構造を持つ資料に対するインタフェースという位置づけのもと、神話における系図表示システムの構築を検討する。神話を対象とした理由は、複雑かつ多岐にわたり、かつ現在進行形で現実社会に生きる一般市民を対象とする系図では、法的・倫理的問題が大きいからである。プロトタイプを実装するための史料として『古事記』上巻を採択した。手法としては、この史料における本文語彙検索から派生して、神話上の系譜を検討する。

この研究は、平成18年に、『古事記』上巻をモデルとした検索システムのプロトタイプを作成したことから始まった。その作成過程で、長編のテキストやその付随情

報をコンピュータ上で提示する従来の方法では、最適な視覚効果が得られないのではないかと疑念が浮上した。これは、書籍の持つ紙面という制約をコンピュータシステム上で解決してこなかったことにあると考えられる。また、注目して閲覧したい対象は個々に異なる。その制約の克服検討の過程で、我々は各ユーザーが提示すべきものの優先順位を自ら決める柔軟性の高いインタフェースが同時に必要であると判断した。ところが、この手法に関する先行研究は無い。そこで我々はこのような要求を満たすプロトタイプシステムとしてMagnifying And Simplifying System for Retrieval and Display Genealogy (略称: MaSSRiDGe) を制作した。しかし、MaSSRiDGeは、現段階において完全に要求を満たすことはできていない。

平成20年度前半は、MaSSRiDGeを、上記要求を完全に満たす堅牢なシステムに改良することを目標とする。そして、利用者が簡便に必要なに応じてデータを渡すことのできるシステムの設計を行うことを後半の目標とする。

個人研究

精神主義の受容と展開 —真人社と同朋会運動

研究代表者・教授 水島 見一
(真宗学)

真宗教団は2011年に親鸞750回御遠忌を迎える。そのためにも本研究は、是非とも成し遂げなければならないものと考えられる。

清沢満之は、明治期に出現した仏教思想家である。一宗一派にとどまる思想家でなかった。彼の唱えた精神主義は、近代的自我の批判に込められた仏教思想の確立を意味するものであった。つまり、近代人の実存的要求に対して、「自己とは何ぞや」という命題に身を賭して証した清沢の思想は、多くの近代人の領くところまで仏教を高めたのである。清沢は、親鸞思想を徹底的に生死する自己の実存において了解したが、そのような清沢の営みが、近代教学を構築し、今日に伝承されている。そういう親鸞思想の実存的了解は、近代人に宗教的黎明をもたらしたと言ってよい。

近代教学は、清沢の没後、さまざまな先学によって受

容され展開された。本研究では、その先学の継承する思想（宗教的精神）が、明確な自己否定を基盤とする求道の営為であったことに視点を定め、それが、先学の中でも特に曾我量深・暁島敏・高光大船によって受容され、そして展開された歷程を尋ねたいと考える。具体的に言えば、清沢の精神主義が、「教団改革運動」を端緒に、「浩々洞」→「佐々木月樵時代の太谷大学」→「曾我・金子異安心問題」→「興法学園」→「真人社」→「真宗同朋会」と展開する歴史の検証となろう。

清沢の「自己とは何ぞや」という命題は、曾我によって「法蔵菩薩降誕」として継承され、同時に暁島敏・高光大船の「生活実験」において「郡萌」において具現化された。そして彼らの教化を深く受容したのが、戦後に教団や大学を担うことになる安田理深、訓覇信雄、松原祐善、さらに仲野良俊、柘植闌英、高原覚正らであった。

彼らは戦後混乱期において真人社を創設し、「真宗仏教」を掲げて混乱から再起することを世に宣言したが、それは間違いなく、思想的混迷にさ迷う当時の民衆の要求に応えるものであった。バクネル大学のクックをして、「二十世紀における宗教改革」と言わしめた所以である。そして1962年、高度経済成長期の日本国家の勢いの背後にしひび寄って来る人間疎外の危機的状況下に、訓覇は「個の自覚」の宗教を掲げて真宗同朋会運動を立ち上げたのである。それは人間性回復の営みでもあった。

ここに私は、宗祖七五〇回御遠忌を迎える今日、清沢の精神主義の受容され展開される歩みを、現代的意義を確認しながら検証しなければならないと考える。

海外調査出張報告

フランス高等研究院・ブリストル大学宗教学部 ロンドン大学SOAS出張報告

国際仏教研究 研究員 井上 尚実

3月11日から20日までの10日間、「指定研究」国際仏教研究（独仏班・英語班）の業務のため標記の出張を致しましたので、以下に概要を報告いたします。

3月11日（火）12時35分関西空港発のエール・フランス291便に搭乗し、同日夕方パリ（シャルル・ドゴール空港）に到着、タクシーで市内のホテルへ。12時間以上のフライトは予想以上で大変で、エコノミー・シンドロームになる危険を感じた。業務に入る前に一日の休養が必要と思われる。

3月13日（木）の昼、研究のために渡仏中の国際文化学科（フランス文化）番場寛教授とホテルで待ち合わせ、訪問前に打ち合わせをした後、約束の午後2時半にフランス高等研究院（EPHE-CNRS）にジャン・ポール・ヴィレーム教授を訪問。学术交流協定に基づいて2009年度にパリで予定されている合同シンポジウム（コロック）について約2時間に渡って打合せを行なった。確認・合意された点は以下の通り。

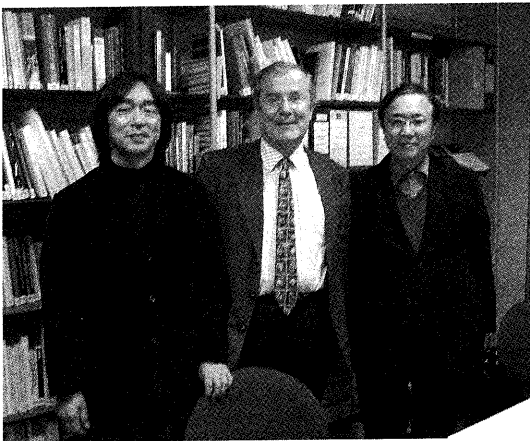
- 2009年5月合同コロック（2日間）の開催日程について
 - ・第1候補 5月14日(木)～15日(金)
 - ・第2候補 5月18日(月)～19日(火)
 - ・第3候補 5月27日(水)～28日(木)日程の決定は4月末までに（学会開催補助金申請のため）。大谷側の決定を出来るだけ早く（遅くとも4月末まで）に連絡する。大谷側は開催前日にはパリに到着するようにする。
- テーマについて
双方の発表者が決まったところで現在の研究課題・関心に配慮して決める。
 - ・「宗教と政治」「宗教と家族」では広すぎる。
 - ・「ナショナル・アイデンティティーと宗教」現代フランスの直面する課題

- ・「宗教の分野における公共政策」と「市民宗教の問題」
 - ・「異文化多国籍の人々の共存（グローバリゼーション）と政府の宗教政策」
 - ・「宗教と世俗化」ウルトラモダンの問題など
3. 二日間の合同コロックで発表する人数
- ・合計12人で大谷から6人（可能なら）。
 - ・現実的に費用フランス側で招待（往復航空券・4泊の宿泊費）できる見通しは4人。
 - ・4人招待すると日仏の同時通訳の経費は出ないであろう。
 - ・発表と質疑応答はフランス語か英語で。前もって梗概を送る。
- GSRL (Groupe Sociétés, Religions, Laïcités) 側で発表が予想される人

- 1) Jean-Paul Willaime
- 2) Jean Baubérot
- 3) Philippe Portier (Political Science) New (soon to be) Director of GSRL
- 4) Severine Mathieu
- 5) Hartmut O.Rotermund

大谷側の発表は、近代・現代日本に関わるようにして欲しい（比較・ディスカッションがまとまりのあるものになるように）。

発表予定者6人の名前と発表テーマも2008年4月末までにWillaime教授に知らせる。（グラント申請の書類締め切りが6月なので、そこに具体的な名前とテーマを記す必要がある。後日の一部変更は可能。）



CNRSのオフィスにて

4. 会場はCNRSの一階にあるカンファレンス・ルーム（70席程度）の可能性が大きい。
Maison de l'Asieも予算が取れれば可能。
5. 今回もフランス側でコロックの成果を出版するこ

とはないであろう。

（以上については、3月25日の独仏版のミーティングで報告済み）

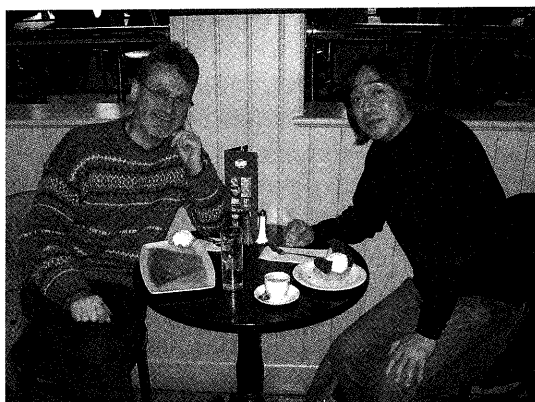
3月14日（金）には、蒲池信明氏（元真宗大谷派教学研究所研究員・フランス国立高等研究院博士課程留学中）を交えて懇親会を開催し、日仏の学術研究交流・協力に関して、特に仏教・真宗関係の翻訳・通訳の問題について助言をいただいた。

3月15日（土）にシャルル・ドゴール空港9時35分発のエール・フランス機でイギリスのブリストル空港に到着。タクシーで市内のホテルへ移動。

3月16日（日）一日余裕があったので、日帰りでオックスフォード大学のブルックス・カレッジで日本文化・宗教について教鞭をとるジョン・ロブレグリオ先生を訪問。オックスフォードの街を案内していただき、日本研究・仏教研究関係の図書館等を見学。オックスフォードからの帰途、列車内で偶然、バス・スパ（Bath Spa）大学仏教学科マヒンダ・ディーガレ教授と出会い、バス・スパ駅で途中下車して夕食を共にし、イギリスの仏教学界の現状についてお話を伺った。仏教伝道協会のポストドク奨学金を得て、京都で研究された経験を持つマヒンダ・ディーガレ教授は、数年前にバス・スパ大学の仏教学科にポジションを得てイギリス・ヨーロッパを中心に活躍されており、知り合いも多い大谷大学（仏教学科）と将来的に研究交流を望まれていた。バス・スパは世界遺産に指定されたローマ時代の遺跡が残る落ち着いた雰囲気のある都市で、ブリストルにまで鉄道で15分、ロンドンまで1時間半という便利な所に位置し、ディーガレ教授を中心に今後仏教研究が盛んになることが予想される。

3月17日（月）、約束の12時少し前にブリストル大学宗教学部に出向き、ポール・ウィリアムズ教授（学部長）の研究室で2時間の面談。ブリストル大学は1980年代初めにポール・ウィリアムズ教授が着任してからインド・チベット仏教を中心に仏教研究センターとして発展してきたが、近年は台湾からの寄付・漢訳蔵経の寄贈をもとに中国仏教専門の教員を加え、近い将来には日本仏教についても教員採用を予定しているそうで、イギリスにおける仏教研究の中心として一層発展していくことは間違いのないという印象を受けた。オックスフォード大学の文献学的方法を主とするテキスト研究に対して、より哲学的・思想的・宗教学的なアプローチによる仏教研究に特色があり、ウィリアムズ教授自身、親鸞に大きな影響を受け、特別な関心をもっているため、今後、大谷大学と研究交流することに積極的な姿勢を示された。面談の後、キャンパスのレストランで昼食（本場のフィッシュ

ユ&チップス)を御馳走になった。3時からの大学院演習授業を控えていたため、お忙しい中の3時間の面談であったが、今後の研究交流について連絡を取り合うことを約束してお別れした。



ブリストル大学キャンパスのレストランにて



ブリストル大学キャンパス中心部

ブリストル大学から市内の temple・ミード駅に戻り、英国鉄道の午後4時特急でロンドンへ。所用時間約1時間40分。そのままパディントン駅前のホテルにチェックイン。

3月18日(火)パディントン駅前からタクシーでロンドン大学SOASへ。10時から13時まで、名古屋大学大学院とSOAS日本宗教研究センターとの合同セミナーに出席。当日はセミナー2日目で、名古屋大学の阿部泰郎教授による新発見の中世密教文書についての講演と、仏教伝道協会客員教授でSOASにおいてセミナーを担当されている彌永信美教授・SOASのルチア・ドルチェ教授による専門的で興味深い質疑応答があった。参加者は20名程度と小規模であったが、講演の原稿の英訳・資料が印刷された立派な冊子が用意されており、COEの効果が現

れた充実した学術研究交流プログラムであるという印象を受けた。



SOASセミナー会場 彌永・阿部・ドルチェ教授



ロンドン大学 SOAS

3月19日(水)、早朝にホテルをチェックアウトし、パディントン駅からヒースロー・エクスプレスで空港へ。予定通りにエール・フランスの飛行機をパリで乗り継ぎ、翌20日(木)朝9時過ぎに関西空港へ帰着。やはり12時間以上のエコノミークラスは通路側の席が取れないと身体に良くないと感じた。

10日の出張期間中、予定されていたフランス高等研究院・ブリストル大学宗教学部・ロンドン大学SOASでの業務に加えてオックスフォード大学とバス・スパ大学の仏教研究者とも交流できて、有意義な出張であった。

協議会参加報告

全国大学史資料協議会参加報告

大学史研究 研究補助員 小野 賢明
大畑 博嗣

2007年度大学史研究班は、本班が会員となっている全国大学史資料協議会に4度(5/30,7/20-21,10/11-13,12/5)参加した。ここでは、4度の協議会の概略と協議会参加における成果を報告する。

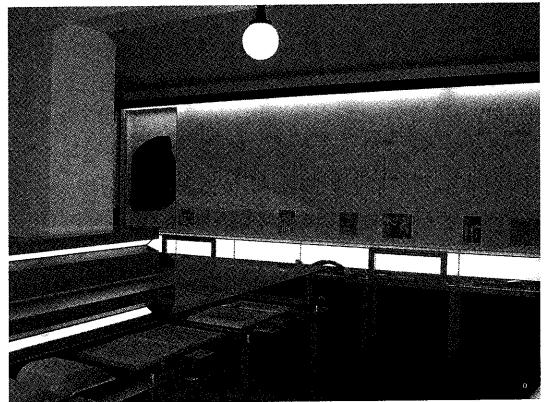
1：5月30日(水) 関西大学において、「全国大学史資料協議会西日本部会 2007年度総会および第1回研究会」が行われた。総会に引き続いて、第1回研究会が開催され、関西大学学術センター次長の熊博毅氏より「関西大学120年史の編纂と年史資料展示室の開設について」として研究発表がなされた。熊氏の研究発表において、『関西大学120年史』および写真集である『関西大学120年のあゆみ』の編纂における作業の流れと苦労、これまでに収集した年史資料の展示を目的とした年史資料展示室の開設にあたっての流れと苦労の報告があった。研究発表の中でも①関西大学における記念誌の刊行における、編纂体制の変遷(『70年史』：文学部教員が草稿を準備→『100年史』：事務局主導型→『120年史』：各部署に草稿の執筆を依頼)。②自校史教育の展開(現在、新規採用事務職員に対して事前研修時に自校史教育を1時間程行っているが、新任教員に対しては行えておらず、また学生への自校史教育の実施[カリキュラム化]も明確に整備されていないとのこと)。の二点は特に注目すべき点であった。

研究会の後、年史資料展示室と関西大学博物館を見学した。

2：7月20日(金) 福岡県西南学院において、「全国大学史資料協議会西日本部会 2007年度第2回研究会」が行われた。西南学院大学図書館長の後藤新治氏から「W.M.ヴォーリスと西南学院博物館」という講題で、講演が行われた。この講演では、西南学院創立者であるC.K.ドージャーと西南学院旧本館・講堂の設計者W.M.ヴォーリスの人物史が紹介された。講演後、参加者は西南学院旧本館・講堂と西南学院大学博物館を見学した。

翌21日(土)は、2005年10月に開館した九州国立博物館の見学を行った。九州国立博物館文化財課研究員の東昇氏による館内の説明の後、参加者と共に収蔵庫や文書

史料の修復作業を行う作業室を見学した。九州国立博物館の取り組みの中で注目すべき点は、環境ボランティアの導入であろう。この環境ボランティアは、収蔵庫内に保管されている資料を虫の害から防ぐために収蔵庫内の清掃を行うボランティアである。この取り組みは、資料保存を目的とする燻蒸ガスをあまり使用しないようにするためであり、博物館における資料保存という問題に一石を投じる取り組みではないかと感じられた。



西南学院大学博物館

3：10月11日(木)～12日(金) 東京都成蹊学園において「全国大学史資料協議会 2007年度総会ならびに全国研究会」が行われた。総会に引き続き、同会場で、上田祥士氏(成蹊学園100年史編集委員会、成蹊学園校医)、市村麻衣氏(成蹊学園史料館)の両名の記念講演が催された。上田氏からは、「成蹊学園の創立者・中村春二」と題し、主に①中村の誕生から成蹊園開塾まで、②五つの学校開設、③成蹊教育会運動、④一貫教育への転換、そして中村の逝去、⑤関係の深い学校、⑥特徴的な教育方法・建学精神、をテーマとして、成蹊学園創立者中村春二及び成蹊学園創立に関する事項について概説がなされた。中村春二及び成蹊学園の特徴的な教育方法と「個性を持った自立的な人間の創造」という建学の根本精神は、目を引くものであった。中村春二の教育理念の基となっているのは、国文学と曹洞宗である。そこに自然から学ぶ視点と自己の精神の鍛錬の必要性を学びとり、自

らの教育理念としたのである。中村は、個性を埋没させていくような画一的な教育を嫌い、個性を伸ばす教育を尊重した。それは、本当の自己とは自己鍛錬・精神鍛錬においてのみしか出遇えないという根本精神があったからである。そのため、凝念法、心力歌、鍛錬主義の教育を教育の柱としたのである。また、少数教育の必要性や生徒（個性）に合わせた教育の必要性など、その教育理念は非常に興味深いものであった。

続いて、市村氏からは「成蹊学園史料館～設立の経緯と史料の収集・保管～」と題し、①成蹊学園の歴史と成蹊学園史料館所蔵史（資）料の特色、②成蹊学園史料館設立の経緯と史（資）料整理の変遷、③課題、をテーマとして成蹊学園史料館の歩みが講ぜられ、成蹊学園史料館が設立・開館されたその経緯が詳しく説明された。

上田、市村両名の講演の後、成蹊学園史料館の見学が行われた。

翌12日には、「2007年度全国研究会」が行われた。今回の研究会では「創立期大学史資料の特色」をテーマとし、Ⅰ. 山本美穂子氏（北海道大学大学文書館）、Ⅱ. 池田裕子氏（関西学院学院史編纂室）、Ⅲ. 大平和典氏（皇學館館史編纂室）の3名により研究発表が行われた。この3名の所属する大学は、その創立にそれぞれ大きな特徴をもつ。北海道大学は、国立大学としての創立である。関西学院は、海外の教会を設立母体とする創立である。皇學館は、GHQの神道指令発令による解散命令を受けての完全なる廃学から再興に至った経緯をもつ唯一の大学である。

Ⅰ：北海道大学大学文書館の山本氏からは、「札幌農学校簿書とその周辺」と題し、①北海道大学の大学沿革資料、②札幌農学校簿書について、③札幌農学校簿書の活用をめぐって、をテーマとして北海道大学の創立期の特色について発表がなされた。「札幌農学校簿書」は、公文録、入校関係書類、生徒名簿、生徒諸届綴、授業科目・試験表、成績表、修学旅行報文、図書日録、当直日誌、出勤簿などが綴られた文書群で、大学沿革史編纂の一次資料として、特に、「制度史」の視点から取り上げられ、重用されてきた。一方、北海道大学大学文書館では、札幌農学校14期生の平塚直治の受講ノート4冊を受贈したことを契機に、「札幌農学校簿書」を、新たに「学業史」の視点から取り上げて活用することに力を注いでいるという。平塚直治という個人がどのような学業生活を送っていたかという個人の記録資料から、「札幌農学校簿書」を活用するということである。北海道大学大学文書館では、公文書である「札幌農学校簿書」と私文書である個人資料の両面からアプローチして、札幌農学校史を新たに解明していくことを課題としているという。

Ⅱ：関西学院学院史編纂室の池田氏からは、「関西学院創立初期の宣教師関係資料―北米での調査・資料収集からその活用まで―」と題し、①関西学院史資料の特徴、②これまでに行った海外調査・資料収集とその成果、③海外調査・資料収集実現に至った経緯、④海外調査・資料収集の経験から言えること、をテーマとした研究発表が行われた。池田氏は、関西学院の創立期を尋ねるには、日本の大学の歴史としての側面（日本側からの視点）だけでなく、メソヂスト（プロテスタントの一派）の歴史の一部としてメソヂスト側（宣教師側）からのアプローチも不可欠であるとして、宣教師関係資料の調査・収集・活用を課題としていることが発表された。

Ⅲ：皇學館館史編纂室の大平氏からは、「皇學館大学の再興とその資料」と題し、①皇學館の年史・記念誌、②廃学から再興に至る経緯（a、廃学、b、伊勢専門学館・清明高等学院、c、五十鈴会の設立、d、皇學館後援会の活動、e、再興後の教育体制・学風）をテーマとした研究発表が行われた。皇學館は、明治15（1882）年創立であるが、GHQの神道指令発令を基に、GHQによって解散命令を受け昭和21（1946）年に神宮皇學館大學官制廃止（廃学）となった。しかし、廃学後も復興の流れは失われず、昭和37（1962）年現在の皇學館大學へと再興（新しい大学を設立したという認識ではなく、あくまで神宮皇學館大學の復活・再興）を果たす。そのような廃学→再興という歴史背景をもつ大学である。今回の発表では、廃学から再興を果たすまでの経緯とその流れの中での史資料の移管や返還、喪失などの歴史が報告された。

翌13日（土）には、川崎市公文書館を見学し、中間書庫としての役割などを学んだ。

4：12月12日（水）大阪樟蔭女子大学田辺聖子文学館において「全国大学史資料協議会西日本部会 2007年度第4回研究会」が行われた。大阪樟蔭女子大学学芸学部教授・田辺聖子文学館副館長の中周子氏から「田辺聖子と樟蔭」という講題で、また田辺聖子文学館事務部長の高橋重樹氏から「田辺聖子文学館の開設経緯」という講題で講演が行われた。中氏の講演では、大阪樟蔭女子大学の歴史、同校の卒業生で小説家田辺聖子の半生と田辺聖子文学館のコンセプトなどについて講ぜられた。続いて、高橋氏からは文学館開設の経緯に関して講演が行われました。

講演の後、田辺聖子文学館と、同市内にある司馬遼太郎記念館を見学した。

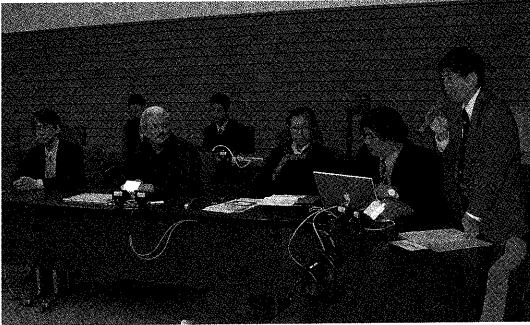
以上が、2007年度に参加した「全国大学史資料協議会」

の概略であるが、「大学史」に関する各学校の取り組みを学ぶことは非常に重要なことであると感じた。研究発表をされた各大学ともに、「大学史」という取り組みは、単に史資料の収集・保存を目的とするのではなく、その公開と史資料から学ぶ自校の建学の精神・創立の精神の再確認、そして自校史教育の充実といった大きな目標が感じられた。その全てが大谷大学においても重要なことである。特に「本学は他の学校とは異りまして宗教学校なること殊に仏教の中に於て浄土真宗の学場であります即ち我々が信奉する本願他力の宗義に基きまして我々に於て最大事件なる自己の信念の確立の上に其信仰を他に伝へる即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが本学の特質であります」（『清沢満之全集』第7巻、岩波書店）という宣言のもと創立された真宗大学の精神を受け継ぐこの大谷大学にあって、全教職員・全学生をあげた建学の精神の再確認と自校史教育の徹底は不可欠であろう。また、年史刊行や収集史資料の公開における他大学や他機関の手法などに関しても、学ぶべき点が多岐に多く、当協議会に参加し情報交換することの重要性を確認した。

研究開発報告

「Mac OS X 10.5 Leopard」へのチベット語システム提供

西蔵文献研究 研究員 三宅伸一郎



記者発表（於 マルチメディア演習室）

2007年10月26日、世界同時発売されたアップル社の新OS「Mac OS X 10.5 Leopard」には、西蔵文献研究班（以下、本研究班）が開発した「Kailasa」「Kokonor」という2種類のチベット文字フォント、「Tibetan-Otani」というキーボード配列をはじめとするチベット語システムが搭載されている。2007年11月6日、響流館3階マルチメディア演習室を会場とし、本件についての記者発表をおこなった。記者発表には、兵藤一夫所長（当時）をはじめ、福田洋一研究員、野村正次郎嘱託研究員、スティーブ・ハートウェル（Steven Hartwell）嘱託研究員など開発に関わったメンバーが参加し、本件の持つ意義を説明するとともに、記者からの質問に答えた。

本研究班では1990年代よりチベット語のコンピュータ利用、とりわけアップル社のOS・マッキントッシュによるそれを、課題の一つとして取り組んできた。そもその発端は、ブータン王国政府の要請と助成を受け、ブータンの国語「ゾンカ語」のコンピュータ利用のために、「Mac OS 6」対応の「ドック・システム」が開発されたことにあった。この開発に取り組んだのが、本学出身の今枝由郎氏と、当時アップル社のプログラマーであったスティーブ・ハートウェルの2人である。

その後アップル社は、多言語環境を実現する機能「WorldScript」を開発、新OS「Mac OS 7.1」に搭載した。これにともないドック・システムには、WorldScriptに対応することが求められた。その開発を本研究班が引き受け、ドック・システムをWorldScript 7.1に対応する「Tibetan Language Kit for Macintosh」（以下TLK）として

完成させた。TLKは、今枝由郎氏およびスティーブ・ハートウェルの協力を引き続き得ながら、さらに福田洋一（当時：東洋文庫）の協力も得て開発された。フォント「Kailasa」は福田洋一によって作成された。こうして開発されたTLKは、1995年にSchloß Seggau（Austria）で開催された、第7回国際チベット学会および、大谷大学で開催された第43回日本西蔵学会大会で配布された。その後WorldScriptが7.6にヴァージョン・アップされたのにもない、対応アップデート版を2000年にWeb上で公開、配布した。アップデート版には新たに野村正次郎によって作成されたフォント「Kokonor」が搭載された。

2001年にアップル社がMac OS Xを発表して以降もTLKのアップデート開発を続け、2006年秋には、名前を「Otani Unicode Tibetan Language Kit」と改め、そのパブリック・ベータ版を公開した。

Mac OS X 10.5 Leopardに本研究班が開発したシステムが搭載されたということは、2つの点から極めて画期的な出来事である。

1つは、文系の単科大学と世界的なコンピュータ会社アップル社との共同開発という、極めて稀な例であるということである。周知のとおりチベット文字は、左から右への横書きながら、綴りの上で文字が縦に結合される。その結合を正しく表示させ、出力させることが、チベット文字をコンピュータ上で処理する際、要求されるのであるが、では、どれだけの縦結合の組み合わせパターンが存在するのか、換言すれば、どれだけの組み合わせが必要なのか（不要な組み合わせに対応することは無駄である）、ということについて、明確に回答できる者はいなかった。本研究班はこの点に注目し、チベット語初辞書である『翻訳名義大集』（824年）を綿密に調査し、そこに見られる組み合わせを出現頻度とともに分類し、この作業結果をもとにフォントを作成した。本研究班開発のシステムは、長年にわたるチベット研究に裏打ちされた信頼性のあるものであり、その点をアップル社によって認め、Mac OS X 10.5 Leopardに搭載されることとなったのである。我々のシステムを採用したアップル社に感謝したい。搭載に至るまでのアップル社との交渉ならびに開発作業には、スティーブ・ハートウェル、野村正

次郎があたった。

もう1つは、文字コードをユニコード (Unicode) に合わせたことにより、情報の交換と共有を可能にしたということである。

ユニコードとは、世界中で使用されているすべての文字をコンピュータ上で、共通のコードで利用できるようにするため、1980年代に提唱された、いわば、世界標準の文字コードであり、すべてのコンピュータ会社がこれを採用している。これまで多くのチベット文字フォントが作成されてきたが、それぞれ独自のコードを用いており、ファイルを共有することができなかった。日本語にたとえるならば、「平成明朝」を「ヒラギノ明朝」に変えると、文字化けが起こるといふ、信じられない状況を、チベット語使用者は体験せねばならなかった。これによりチベット語データ・ファイルのやりとりは、極めて容易となった。別のユーザが、同じファイルをチベット文字で閲覧し処理し印刷することが可能となったのである。チベット文字をローマ字転写に変換する必要もないのである。チベット文字を使ったWebページの作成と閲覧も容易となった。いわば、コンピュータ上で日本語や英語を扱うのと同じ常識的な地平に、チベット語も立ったのである。これにより、異なったOS間でのチベット語データ・ファイルのやりとりはもちろんのこと、チベット文字を使ったWebページの作成と閲覧、メールのやりとりなども極めて容易となった。今回のこの出来事が、チベット文化の発展に大きく寄与すると開発に関わった者たちは皆信じている。

記者発表の様子は、『京都新聞』『産経新聞』『中外日報』の各紙ならびに『Mac Fan』(1月号)に掲載された。

なお、本研究班の開発したチベット語システムの紹介・サポートのためのwebページを開設している。あわせてごらんいただきたい。

(<http://www.outlk.net/jp/index.html>)

学術共同研究報告

東北師範大学との共同研究報告

国際仏教研究(中国班) キャップ・教授 桂華 淳祥

2008年3月16日(日)~22日(土)、真宗総合研究所国際仏教班と東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の一環として、程舒偉東北師範大学教授、智利疆東北師範大学講師を招聘し、桂華淳祥研究員、木場明志教授、浅見直一郎准教授、松川節主事とともに本学にて研究活動を行った。この間、3月19日(水)に響流館3階マルチメディア演習室にて、公開研究会を開催し、程舒偉教授、智利疆講師がそれぞれ報告を行った。

「民国時期華北地方の宗教の東北地方における伝播」 (程舒偉)

中国の東北地方では、伝統的な少数民族が居住していたため、シャーマニズムのような民族宗教が大勢を占め、仏教・道教・儒教の影響は少なかった。一方、キリスト教・イスラーム教などの外来宗教は、伝統組織の活動によって伝播したが、民国初年より知識人による排斥を受け、開化して間もない東北地方では市場を開拓することが困難であった。

日本では明治維新以後、移民の増加に伴って、浄土真宗・浄土宗・曹洞宗・日蓮宗などの宗派が海外、特に中国東北・華北、台湾の各地方で布教活動を行ってきた。これら日本仏教の布教は、日本の中国に対する文化的侵略の側面と、近代における日中の多元的な文化交流の側面とを有している。

中国の伝統宗教にせよ、外来の宗教にせよ、いずれも信徒数・影響範囲の面で絶対的な勢力を確立するには至らなかった。そこに民間信仰の乗ずる隙があり、民間信仰は比較的自由に伝道活動を行い、信者を獲得していったのである。

民国期以降の東北地方では、明清時代に伝わった伝統宗教に加えて、様々な民間信仰が出現して勢力を拡大した。それらは主として次の3種に分類できる。

①伝統的あるいは原始的宗教

- a) 一貫道…最も歴史が古く、伝道範囲・勢力とも最大の教派。清末の山東で王覚一が創始した。東北地方には1938年に流入し、瞬く間に勢力を拡大した。その背景には、厳密な階級制度と組織を有する教団

体制があった。

- b) 在理教…清初に楊来如が創始した。1933年に総本部として「中華全国理教連合会」が成立し、各地に分会が設立され、全国の在理公所は3000を超えた。しかし民間で活動するのみで、政府の統治との間に接点を持たなかった。
- c) 同善社(道德会)…清末に四川の彭汝珍が創始した。偽滿洲国が成立すると彭汝珍は次男の彭宝善を長春の溥儀のもとに送り込み、その支持を取り付けた。1937年に彭汝珍が蒋介石に逮捕され、中華人民共和国建国後、汝珍は自殺し、その子は処刑され、同善社は解体された。
- d) 九宮道…清の光緒年間に李向善が創始した。1920年代に北洋軍閥のもとで活動を公開し、瀋陽・長春に分会を立てた。抗日戦争期に、九宮道の多くの会派は日本に身を投じて東北地方で教線を拡大したが、抗日戦争に勝利した後は国民党に身を寄せ、50年代に取締りを受けた。
- e) 家里教(家理教)…清の康熙年間に杭州の潘徳林、山東の錢徳正・翁徳慧が創始した。民国期に山東・河北で非常に多くの信徒を有し、後に多くの信徒が東北地方に移住した。

②宗教的社会団体

- a) 紅十字会…1916年に山東の呉某・劉某が創立した道場を起源とし、1922年に世界紅十字会が設立した。東北地方には1916年に伝わり、長春道院が設立された。地元の名士による慈善団体であり、難民収容所・貧民初等学校・診療所・助産院などを設立した。1948年に自主的に解散した。
- b) 万国道德会(道德会)…1921年に山東人が済南で創立した。女性の啓発・家庭の和睦・精神の健康をはかるのがこの会派の特徴である。偽滿洲国の公認を受け、社会の上層に属する人々から支持されたが、日本と偽滿洲国政府に利用され、偽滿洲国の滅亡とともに消滅した。

③武装会派

- 東北紅槍会(太刀会)…軍閥に反抗する武装勢力として1927年に誕生した。満州事変後、抗日義勇軍に吸収

改編され、盧溝橋事件を契機に中国全土の抗日戦線に加えられた。

以上をまとめると、東北地方においては、満洲族と漢族移民との間に信仰上の相違があり、多種多様な信仰が併存していた。これは、これら二つの大民族が長期的に共同して生活する中で、風俗と文化とが相互に影響し、不断に融合した結果をあらわすものである。漢族と少数民族との交流と融合は、民族の団結と凝集力を増強し、統一的な多民族国家を発展させる重要な作用をもつのである。

「偽満洲国時期における「国家祭祀」の日本化」(智利疆)

偽満洲国が樹立されて以後、国内において共通の「国家信仰」を生み出すために、法律を頒布し、専門の政府機構を設け、「国家祭祀」として指導し、さらに民間信

仰もこれに服従すべきであることを厳命した。それにより各種「国家祭祀」は繁栄をみた。当該時期の「国家祭祀」活動の変遷を総観すると、主に三段階に分類できる。その段階とは、1) 漢滿伝統精神信仰に対する容認から始まり、2) 日本の祭祀様式の入植、そして3) 完全に日本側によって国家祭祀が主導されるというものである。

これら日本の文化信仰上の強硬手段が、期待した効果を得られず、かえって偽満洲国政権と民衆の普遍的な心理による排斥を招致したのは、当然のなりゆきであろう。言い換えれば、偽満洲国「国家祭祀」の日本化は、もとより当時の統治強化の作用を果たしていたが、これを歴史的角度から見ると、異民族に対する精神信仰上のこうした強硬手段は、かえって失敗するといえるのである。



東北師範大学程教授(前列左3人目)・智講師(後列左3人目)於学長室

特別研究員研究成果報告

学術は天下の公器なり

特別研究員 井黒 忍

2007年6月12日より同年11月28日にかけて行った山西大学中国社会科学研究中心（センター）での在外研究の報告を行う。期間中に行った研究活動は、(1) 図書館・研究センターでの資料調査、(2) 学会・シンポジウムへの参加、(3) 現地調査に分かれる。以下、項目ごとにその概略を述べる。なお、今回の在外研究は平成19年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を用いて行った。記して関係各位に謝意を表す。

(1) 図書館・研究センターでの資料調査

資料調査を行った所蔵機関は、山西大学図書館、山西



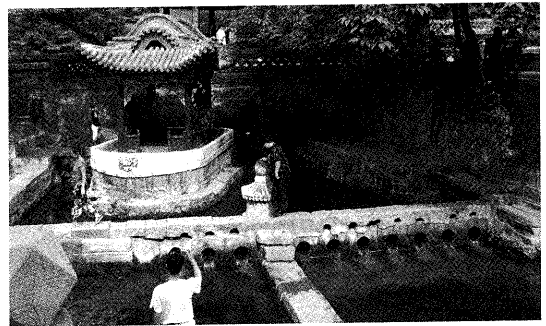
太原賈大夫祠

大学社会科学史研究センター、山西省図書館である。受け入れ先である山西大学は、1902年に創設された山西大学堂を前身とし、京師大学堂（北京大学の前身）や北洋大学堂（天津大学の前身）と並ぶ中国国内有数の歴史を有する高等教育機関である。

大学の中心に位置する初民広場に面して建つ図書館は、地上10階建て、約190万冊におよぶ蔵書量を誇る。中でも、8・9階の古籍閲覧室には、四庫系列の叢書を初めとする基本典籍がそろい、加えて明清時代の各種地方志が所蔵されるなど、研究活動に極めて良好な環境を備える。

また、10階に社会科学史研究センターが置かれ、教員・学生が日々の研究活動を行うとともに、各種の研究報告会が催される。筆者も日本における環境史研究の現状に関して報告を行ったが、特に大学院生らの熱心な取り組みには圧倒される思いであった。同センターは、現在、中

国国内において最も関心を集める分野である社会史を専門とし、スタッフには中国社会科学史研究をリードする行龍、郝平、張俊峰、胡英沢（敬称略）といったメンバー



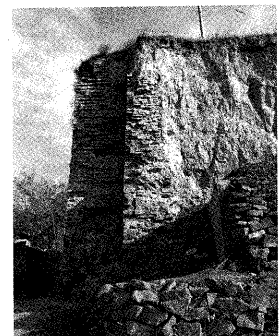
太原晋祠難老泉

が並ぶ。研究方面における特徴としては、水利や災害といった事象から中国社会を考察するという点にあり、筆者の関心に最も近いテーマである。

研究センターの所蔵資料に関しては、教員・学生が継続して行ってきた現地調査により得られた地方文献、地方档案（文書）、石刻、水冊などに特徴が現れる。これらの資料は、地方の档案馆や村落に保管されていたものであり、一般の研究者、特に外国人研究者には、利用が極めて困難なものである。さらに、放置すれば容易に散逸する可能性があることから、研究センターの行う現地調査、資料収集活動の意義は極めて高いものと言える。

山西省図書館は太原市区の中心、迎沢公園の西方に位置し、山西大学からの交通の便は良好とは言えない。省図書館においては、東楼3階山西地方文献閲覧室、および6階古籍閲覧室にて資料調査を行った。前者では、主に20世紀以降に公刊された各種の地方志類を閲覧し、後者では明清時代の地方志および石刻拓本を閲覧した。

古籍閲覧室に所蔵され



寧化古城城壁

る石刻拓本は、省図書館所蔵拓片と三晋石刻拓片の両種に分類される。この内、三晋石刻拓片は太原石刻研究会が収集した拓本であり、筆者の研究に関連するところでは、遼金元時代の拓本123種、水利等に関わる拓本15種を確認し、その一部を閲覧した。

(2) 学会・シンポジウムへの参加

在外研究期間内に参加した学会等と報告テーマについては、以下の通りである。各報告内容に関しては省略するが、論文集への寄稿を行っており、近く出版される予定である。

2007.7.20～7.23 成吉思汗与六盤山一紀念成吉思汗逝世780周年国際学術研討会、寧夏回族自治区固原市。

2007.8.19～8.21 太原建設特色文化名城国際学術研討会暨山西省古都学会2007年年会、山西省太原市、報告テーマは「太原竇大夫祠金元時代祈雨碑刻研究二題」（中国語にて口頭発表）。



開城遺址（固原シンポエクスカーションにて）

2007.11.24～11.26 明清時期北方辺塞地方民族分布与環境変遷学術研討会、復旦大学歴史地理研究中心、報告テーマは「雍乾時期甘肅河西地区的"界線"一開発、環境、紛争」（中国語にて口頭発表）。

(3) 現地調査

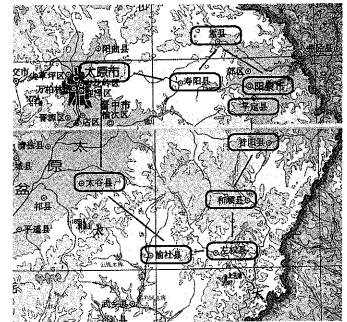
今回の在外研究は、筆者の研究課題である「中国近世の山西汾河水系における水資源の開発と利用」に基づいて実施したものであり、研究対象地域である汾河流域の現地調査が主たる目的であった。中でも、遼金元時代および水利関連の石刻資料収集が調査目的となる。調査地域のうち、太原市及び同市区内の各県（清徐県・陽曲県・古交市）については、日帰りにて調査を行った。これら以外の複数日時に亘る調査地域および同行者は以下

の通りである。

2007.7.15～7.28 寧夏回族自治区・甘肅省・陝西省における金元碑調査、同行者は船田善之氏（九州大学講師）。

2007.8.4～8.9 太原市・応県・渾源県・大同市における石刻・考古調査、同行者は徐光輝（龍谷大学教授）・田中俊明（滋賀県立大学教授）・菅原一真（龍谷大学院生）・郭潔（同左）・劉晶晶（中国清華大学院生）の諸氏。

2007.8.30～9.11 陽泉市区・晋中市區における金元碑調査、同行者は飯山知保（日本学術振興会特別研究員・東洋文庫）および船田善之の両氏。



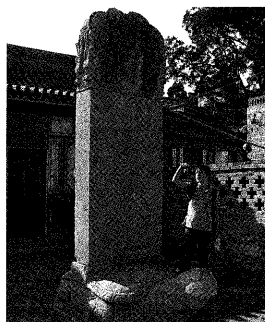
陽泉・晋中調査行程

2007.10.19～10.21 朔州市・寧武県における石刻資料調査。

2007.10.25～10.27 晋中市區における石刻資料調査。

2007.11.3～11.5 稷山県・河津市における石刻および水利施設現地調査、同行者は張俊峰氏（山西大学副教授）。

紙幅の関係上、これら全調査内容を提示することは困難であるため、ここでは



石門寺「重修石門寺記」

2007年8月30日より同年9月11日にかけて、飯山知保・船田善之の両氏とともに実施した陽泉市区および晋中市區調査の行程および実見した金元時代仏教関連石刻資料について記す。

8/31(金) 太原市→寿陽県

○福田院（寿陽県平頭鎮黒水村）「福田院創建正殿記碑」至順4年

9/2 (日) 孟県

○建福院 (孟県牛村鎮白土坡村)「建福院宛尚書札部牒」
大定4年 (上載) / 「大金国河東北路太原府孟県白土坡
建福院記」 (下載)

9/3 (月) 孟県→陽泉市

○寿聖寺 (孟県蔭宮鎮三都村)「仏頂尊勝陀羅尼經幢」
皇統元年 / 「重修寿聖寺記」大徳12年

9/4 (火) 陽泉市→平定県

○智覚寺 (平定県巨城鎮連莊村)「重修智覚寺記」元統
3年

○馬齒岩寺 (平定県東回鎮馬山村)「李胤還父口願粧塑
金剛碑記」至正5年



湧泉院跡「重修湧泉院記碑」

9/6 (木) 昔陽県→和順県

○寿聖寺跡 (昔陽県閻莊郷閻莊村)「重修寿聖寺記」至
正10年

○石門寺 (昔陽県趙壁郷東豊稔村)「重修石門寺記」延
祐5年

○離相寺 (昔陽県趙壁郷川口村)「經幢」泰和4年

9/7 (金) 和順県→左権県→榆社県

○湧泉院跡 (和順県松煙鎮白仁村)「重修湧泉院記碑」
至順元年

9/8 (土) 榆社県→太谷県

○崇聖寺 (榆社県河峪郷上赤峪村)「大金沁州武郷県禪



固関

隠山崇聖寺十方禅会記碑」大定27年 / 「清浄広恵大師塔
銘」元統3年 / 「普恩大師寿公靈塔銘」至正10年

これら調査史料のうち、榆社県河峪郷上赤峪村崇聖寺
に現存する「大金沁州武郷県禪隠山崇聖寺十方禅会記
碑」(大定27年)、および同碑碑陰に刻される「劉方施財
記」(1258年立石)に関しては、既に本学桂華淳祥教授
主催の研究会において会読を行い、録文の作成を終えた。

これまでの現地調査および今回の在外研究を通して、
調査対象地域である汾河全流域の石刻調査を通り行く
ことができた。今後は、これまでに収集した資料を整理
し、データベース化を行うことが必要となる。また、得
られた知見をもとに、より地域を限定して、再度現地調
査を行う予定である。

在外研究の成果としては、上述の現地調査を通じた資



左より胡英沢、筆者、郝平、張俊峰 (筆者を除く他三氏
は山西大学社会史研究センターのスタッフ)

料調査・収集に加えて、山西大学および関連諸機関の研
究者・学生・職員らとの学術交流をなしたことが重要
である。今後も引き続き同地域に関する研究を推進する
ためには、彼ら現地の人々との協力関係が必要不可欠と
なる。大学レベルでの連携はもとより、個人レベルでの
相互理解を深め、信頼関係に基づく協働関係を築くこと
で、一方的な資料の提供やパフォーマンスとしての共同
研究に止まらないより有効な学術交流が可能となると考
える。

なお、表題の語は張俊峰氏が筆者に発した言葉である。
外国人研究者である筆者へのエールであるとともに、研
究者の責任の重さを伝える言と受けとめたい。

末尾ではあるが、今回の在外研究を行うにあたり、ご
尽力頂いた本学および山西大学の関係各位に深甚なる謝
意を表す。

真宗総合研究所彙報 2007.10.1～2008.4.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇11月20日(火) 16時10分～ (博綜館5階第4会議室)

1. 2008(平成20)年度「一般研究」の選考について
2. その他

◇3月6日(木) 13時～ (博綜館5階第3会議室)

1. 2008(平成20)年度「指定研究」について
2. その他

○2008年度「一般研究」研究代表者事務説明会

◇12月13日(木) 12時30分～

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

1. 研究遂行上の準備と事務手続きについて
2. 機器備品・用品貸出・研究施設利用について
3. その他

○「指定研究」チーフ・キャップ・庶務連絡会

◇3月5日(水) 12時10分～

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

1. 今年度「指定研究」の経過について
2. その他

◇4月24日(木) 12時10分～

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

1. 2008年度「指定研究」の研究計画並びに研究体制について
2. その他

○2008年度研究補助員雇用事務説明会

◇4月24日(木) 13時30分～

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

1. 2008(平成20)年度研究補助員の雇用契約に関して
2. その他

■特別指定研究

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

◇10月10日(水) 16:10～18:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第9回公開研究会 (講演)

平雅行氏 (嘱託研究員・大阪大学大学院教授)

「親鸞の越後配流と承元の奏状～『教行信証』後序をめぐって～」

◇11月13日(火) 14:30～16:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第10回公開研究会 (講演)

本多弘之氏 (親鸞仏教センター所長)

「この時代に「本願を聞く」ということ～何を考えるべきか～」

◇11月15日(木) 16:10～17:40 (響流館4階会議室)

第10回研究会

・文献目録作成の進捗状況と今後の方針の確認

◇12月18日(火) 14:30～16:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第11回研究会

・文献目録作成の進捗状況と今後の方針の確認

・研究所発行の冊子について

◇1月15日(火) 14:30～16:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第12回研究会

・文献目録作成の進捗状況と今後の方針の確認

・研究所発行の冊子について

◇2月25日(月) 17:30～19:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第13回研究会

・研究所発行の冊子について

・今後の研究活動について

◇4月9日(水) 12:10～12:50

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第14回研究会

・今年度の研究活動方針について

・シリーズ『親鸞像の再構築』(研究所発行冊子)について

・今後の公開研究会の日程について

◇4月22日(火) 16:10～17:40

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第11回公開研究会 (講演)

佐々木正氏 (萬福寺住職)

「親鸞伝の光と影～正明伝をテキストにして～」

なお、上記研究会の他、パート会議並びに作業を行った。場所、日時は以下の通りである。

場所：真宗総合研究所 御遠忌記念特別指定研究班

日時：・11月9日(金) 13:00～
・2月21日(木) 17:00～

■指定研究

大学史研究

【研究会】

《近世学寮勉強会》

◇10月15日(月) 16:10～19:00 (真宗総合研究所ミーティングルーム)

◇10月29日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇11月12日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇11月26日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇12月10日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇1月7日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇1月21日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇2月19日(火) 16:00～19:00 (同上)

【会議】

《作業連絡会議》

◇10月29日(月) 16:10～19:00 (真宗総合研究所ミーティングルーム)

◇11月26日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇12月10日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇1月21日(月) 16:10～19:00 (同上)

◇2月19日(火) 16:00～19:00 (同上)

◇3月6日(木) 16:00～18:00 (同上)

《『臘扇記 注釈』編集会議》

◇10月3日(水) 第66回 (真宗総合研究所オープンスペース)

◇10月10日(水) 第67回 (同上)

◇11月7日(水) 第68回 (同上)

◇11月14日(水) 第69回 (同上)

◇11月21日(水) 第70回 (同上)

◇11月29日(水) 第71回 (同上)

◇12月7日(金) 第72回 (同上)

◇12月12日(水) 第73回 (同上)

◇12月19日(水) 第74回 (同上)

◇12月21日(金) 第75回 (同上)

◇12月25日(火) 第76回 (同上)

◇12月26日(水) 第77回 (同上)

◇1月7日(月) 第78回 (同上)

◇1月9日(水) 第79回 (同上)

◇1月10日(木) 第80回 (同上)

◇1月15日(火) 第81回 (同上)

◇1月16日(水) 第82回 (同上)

◇1月17日(木) 第83回 (同上)

◇1月25日(金) 第84回 (同上)

◇1月30日(水) 第85回 (同上)

◇1月31日(木) 第86回 (同上)

◇2月1日(金) 第87回 (同上)

◇2月13日(水) 第88回 (同上)

◇2月15日(金) 第89回 (同上)

◇2月18日(月) 第90回 (同上)

◇2月20日(水) 第91回 (同上)

◇2月22日(金) 第92回 (同上)

◇2月25日(月) 第93回 (同上)

◇2月26日(火) 第94回 (同上)

◇2月27日(水) 第95回 (同上)

◇2月28日(木) 第96回 (同上)

◇2月29日(金) 第97回 (同上)

◇3月11日(火) 第98回 (同上)

◇3月13日(木) 第99回 (同上)

◇3月18日(火) 第100回 (同上)

◇3月24日(月) 第101回 (同上)

◇3月25日(火) 第102回 (同上)

◇3月26日(水) 第103回 (同上)

《『東本願寺現代史年表』編集会議》

『東本願寺現代史年表』(仮題)の出版に向けての編集会議

◇10月11日(木)～12日(金) (真宗大谷派宗務所)

◇10月18日(木)～19日(金) (同上)

◇10月30日(火)～31日(水) (同上)

◇11月22日(木)～23日(金) (同上)

◇12月17日(月)～18日(火) (同上)

◇2月7日(木)～8日(金) (同上)

◇3月6日(木)～7日(金) (同上)

【調査等】

《『臘扇記 注釈』編集作業に関する資料調査》

◇1月12日(土)～13日(日)

愛知県碧南市西方寺、愛知県碧南市清沢満之記念館における資料調査。

西方寺本堂の調査、西方寺所蔵の清沢満之・西方寺関係資料をもとに『臘扇記』に出る寺院・人物・地名・書籍・引用文出典・当該時期における西方寺境内の建物の配置等の調査を行う。また、西方寺における仏事・報恩講の式次第等について、聞き取り調査を行った。

(参加者：加来雄之〈研究員〉、西本祐攝〈嘱託研究員〉、後藤智道〈アルバイト〉)

《他研究機関における大学史研究・大学史史料室に関する研究会》

◇10月12日(金)～13日(土)

全国大学史資料協議会2007年度総会並びに全国研究会(於・東京 成蹊大学、神奈川 川崎市公文書館)

(参加者：西本祐攝〈嘱託研究員〉、大畑博嗣〈研究補助員〉、小野賢明〈研究補助員〉)

◇12月12日(水)

全国大学史資料協議会西日本部会2007年度第4回研究会

(於・大阪 大阪樟蔭女子大学田辺聖子文学館、司馬遼太郎記念館)

(参加者：大畑博嗣〈研究補助員〉、小野賢明〈研究補助員〉)

大学史研究では、前年度から継続している注釈『臘扇記』編集作業、佐々木月樵研究のための資料調査収集、大学史資料原本ならびに写真資料の再調査・長期保管作業、東本願寺教団現代史の調査研究・『東本願寺現代史年表』(仮題)発刊に向けての編集会議などの研究課題を進める一方、全国大学史資料協議会への参加による他大学・研究機関との交流、史料の閲覧・貸出や質問などへの対応等日常業務として行った。

国際仏教研究

〈英語班〉

《海外出張》

①11月17日(土)～20日(火)の間、米国カリフォルニア州サンディエゴ市で開催されたアメリカ宗教学会American Academy of Religionの大会に井上尚実研究員が参加し、日本宗教部会のパネルNew Ways of Thinking about Shinbutsu Bunri (Differentiation of Kami and Buddhist Deities and Practices) in Japanにおいて“Shinbutsu Bunri as a Radical Disembedding of Local Religions: The Case of Ono Village in the Northern Ina”と題した研究発表を行ない、海外の仏教研究者と交流した。このAARパネル発表の詳細については、ロンドン大学SOAS日本宗教研究所所報(CSJR Newsletter, January 2008, Issue 16-17, pp.33-35)に、Gaynor Sekimori教授によるレポートが掲載されている。

<<http://www.soas.ac.uk/csjr/newsletter/42957.pdf>>

②3月11日(火)から井上尚実研究員がドイツ・フランス班の業務でパリ高等研究院との打合せのため出張したのに合わせてイギリスを訪問し、16日(日)にオックスフォード・ブルックス大学のJohn S. LoBreglio教授、バース・スパ大学のMahinda Deegale教授、17日(月)にプリストル大学のPaul Williams教授、18日(火)にロンドン大学(SOAS)のLucia Dolce教授と懇談し、今後の研究交流の可能性について話し合った。

《会議・作業》

①1月11日(金)14:30～ 於 響流館4階 客員研究室1

ニューヨーク州立大学のMark Blum教授(当班嘱託研究員)をお招きし、*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings*の出版に向けた編集・校正・仕上げ作業の方針と手順を確認した。それを受けて2月15日・18日・19日・23日・3月1日の5日間、真宗総合研究所のフリースペースにおいて編集・校正作業を行った。

②2月15日(金)13:00～ 於 真宗総合研究所内のミーティング・ルーム

2008年9月20日～23日に、南イタリアのレッツェ市にて開催されるヨーロッパ日本研究協会第12回国際大会12th International Conference of the European Association for Japanese Studiesに大谷大学パネルを派遣する計画について打合せを行った。Where Have All the Pure Lands Gone—Challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism—という題で、近代真宗教学における教権と教学的進展のダイナミクスを明らかにしていく予定である。今回は学会会員登録・大会参加登録の手続きを行い、出張の日程を決め、各発表の進行状況を確認した。

③2月22日(金)11:00～ 於 真宗総合研究所のフリースペース

2007年8月3日～5日にカナダのカルガリー大学で開催された第13回国際真宗学会において発表した大谷大学パネルTranscending Dualism: Neither Monastic nor Secular as a Way through the Troubled World(二項対立を超越して一混迷する世界を渡る方途としての「非僧非俗」)の4つの論文をThe Pure Land誌に掲載するために、内容の最終的確認と校正作業を行った。

〈ドイツ・フランス班〉

《海外出張》

①井上尚実研究員が3月13日にEPHE(フランス国立高等研究院)－CNRS(フランス国立科学研究センター)において、ジャン・ポール・ヴィレーム教授との打合せをした。打ち合わせの概要は以下の通りである。

1. 2009年5月合同コロック(2日間)の開催日程について

2. テーマについて

・「ナショナル・アイデンティティと宗教」、「宗教の分野における公共政策」と「市民宗教の問題」、「異文化多国籍の人々の共存(グローバリゼーション)と政府の宗教政策」、「宗教と世俗化」

3. 2日間の合同コロックで発表する人数

・合計12人で大谷大学側からは6人

GSRL(Groupe Sociétés, Religions, Laïcités)側で発表が予想される人

Jean-Paul Willaime, Jean Baubérot, Philippe Portier, Severine Mathieu, Hartmut Rothermund

《会議》

3月25日(火)13:00-15:00 於 真宗総合研究所ミーティングルーム

井上尚実研究員がフランス国立高等研究院ジャン・ポール・ヴィレーム教授と打ち合わせてきたことを受けて、全体テーマの決定および発表を依頼する研究員を決めた。EPHE側が提示した幾つかのテーマの中から、発表者が自由に選択してテーマを決定することとするが、基本的に大谷大学側の発表は、日本社会（特に現代社会）における宗教という共通テーマを含むこととする。

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

中国華北関連の綴資料（仮番号19～25）の目録作成作業を継続中。引き続き、残された資料（中国華中・華南・台湾、朝鮮半島関係）に順次着手する。

②中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

2007年11月9日（金）～11月12日（月）、桂華・松川の研究員2名と木場明志教授は中国東北師範大学（長春）を訪問。副学長の張紹杰教授と面談し、共同研究の成果として、木場明志・程舒偉（編著）『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』が出版されたことを報告した。さらに、双方の研究員による研究交流会が開催され、最近の研究状況を報告しあい、今後の活動について打ち合わせを行った。

2008年3月16日（日）～22日（土）、程舒偉東北師範大学教授、智利疆東北師範大学講師を招聘し、桂華研究員、木場教授、浅見直一郎准教授、松川主事とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

3月19日（水）15:30～18:00（於：響流館3階 マルチメディア演習室）

○民国時期華北地方の宗教の東北地方における伝播
東北師範大学歴史系 程舒偉 教授

○偽満洲国時期における「国家祭祀」の日本化
東北師範大学歴史系 智利疆 講師
通訳 李青 准教授（本学）

2008年3月27日（木）～31日（月）、桂華研究員、松川主事は中国の華北地域（山西省太原市内・太原市北郊・交城県・晋中市）において、華北仏教についての調査を実施した。

西藏文献研究

《記者発表会》

◇11月6日(火) 午後2時～3時40分

テーマ：OUTLK (Otani Unicode Tibetan Language Kit) が Apple社という世界的なコンピューター会社の OS、Mac OS X Leopard に搭載され、全世界に配布された（10月26日発売）ことに伴い読売新聞他8社に対して、ステイブ・ハートウェル氏（海外在住嘱託研究員）、野村正次郎氏（嘱託研究員）を招聘して、記者発表会を開催した。

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

《公開研究会》

◇12月11日(火) 午後5時50分～7時20分

テーマ：インド文献のチベット語訳とその特徴 (rgyagar gyi rtsom gzhung bod skad du bsgyur ba dang de'i khyad chos)

講 師：チャムバ・サムテン博士 (Dr. Jampa Samten, Central Institute of Higher Tibetan Studies)

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

◇2月12日(火) 午後2時30分～午後5時00分

テーマ：ロシア所蔵北京版西藏大蔵経について

講 師：ウラジーミル・ウスペンスキー教授 (Prof. USPENSKIY Vladimir, St. Petersburg State University)

場 所：響流館4階会議室

◇3月6日(木) 午後4時10分～午後6時

テーマ：ロシア・ブリヤートに現存する柁檀釈迦立像について

講 師：A. A. テレンチョフ博士 (Dr. Andrey Anatolyevich Terentyev, the Center of Buddhist Studies of Hong Kong University)

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

大谷大学DB研究

事務連絡会議

◇4月2日(水) 14:30～15:30

議 題

全体的な研究方針について
その他

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇4月23日(水) 17:00～18:30

議 題

報 告

題 目：「大谷大学におけるデータベース構築の課題と展望」

報告者：松川 節（研究所 主事）

報 告

題 目：「2000～2004年度活動内容について」

報告者：前田 千尋（元DB班嘱託研究員）

研究組織について

活動計画について

その他

場 所：響流館3階演習室1

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟（東本願寺）造営史の全体像把握のための史料調査・史料翻刻・国内調査等、その成果と進捗状況について報告。また、公開研究会を実施すると共に、研究報告会を開催し、史料調査から明らかになった点や問題点を共有化して、今後の課題を整理。

《事務連絡会議》

◇10月19日（金）18：00～19：30

議題：①『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の目次について

②その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇11月2日（金）17：30～19：00

議題：①出版本資料編の内容構成について

②その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇12月10日（月）16：10～17：40

議題：①本の章立てと執筆依頼者について（最終調整）

②今後の調査・研究計画について

③その他

場所：真宗総合研究所フロア フリースペース

◇3月6日（木）17：30～19：00

議題：①2007年度研究成果報告

②2008年度研究計画案策定

③その他

場所：響流館4階プレゼンテーションルーム

《全体会議》

第5回公開研究会（第6回全体会議）

◇11月13日（火）16：10～17：40

議題：①講演会

題目：建築指図史料への視点

講師：山岸常人（嘱託研究員）

②意見交換会

場所：響流館4階プレゼンテーションルーム

第6回公開研究会（第7回全体会議）

◇12月11日（火）16：10～18：00

議題：①講演会

題目：東本願寺再建の根拠 —東西分派伝記・

宗主消息を読み直す—

講師：川端泰幸（嘱託研究員）

②出版本の章立ておよび執筆者について

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第7回公開研究会（第8回全体会議）

◇2月15日（金）16：10～17：40

議題：①講演会

題目：仮両堂の建築について

講師：登谷伸宏（嘱託研究員）

②意見交換会

場所：響流館3階マルチメディア演習室

第8回公開研究会（第9回全体会議）

◇3月28日（金）16：10～18：00

議題：①講演会

題目：明治造営開始期の精神史

講師：江上琢成（嘱託研究員）

②2007年度研究成果報告、2008年度研究計画

③史料データ利用、原稿執筆の原則について

場所：響流館3階マルチメディア演習室

アルバイト懇談会

◇10月16日（火）18：00～19：00

議題：アルバイト体制の移行について

場所：響流館3階マルチメディア演習室

◇1月16日（水）16：30～18：30

議題：①史料翻刻凡例の調整

②資史料の所蔵場所と取扱いについて

場所：響流館4階プレゼンテーションルーム

《調査》

◇10月19日（金）

東本願寺所蔵史料の閲覧

参加者：安藤 弥（嘱託研究員）、川端泰幸（同）、工藤克洋（同）、松金直美

◇3月6日（木）

東本願寺所蔵史料の調査

参加者：木場明志（チーフ）、平野寿則（研究員）、安藤 弥（嘱託研究員）、川端泰幸（同）、大谷めぐみ

(研究補助員)、工藤克洋 (同)、松金直美、山本 琢

■人事 (2008年4月1日付)

研究所長(新)乾 源俊 (旧)兵藤一夫

□特別研究員

* デッシー・ウゴ (DESSI Ugo)

国 籍 イタリア

研究期間 2008年4月1日～2009年3月31日(延長)

研究課題 「日本仏教における宗教意識と社会的行動」

指導教員 安富信哉 教授

* ダシュシヨバラニ (DASH Shobha Rani)

国 籍 インド

現 職 本学非常勤講師

研究期間 2008年4月1日～2009年3月31日(延長)

研究課題 「仏教文献における比丘尼に関するデータベース構築及びその伝記の研究」

指導教員 小谷信千代 教授

* 西山昭仁

国 籍 日 本

研究期間 2008年4月1日～2011年3月31日

研究課題 「歴史地震・津波記録の理工学的手法による検証と発生機構の推定の研究」

指導教員 草野顕之 教授

研 究 所 報 第 52 号

2008年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435